

## 脇 被告証人の証言の矛盾と嘘

### 運輸所のみなさん

真っ赤な嘘 とはこのことか、というような証言を、脇（前運転科長）被告証人が法廷でしました。概要ですが、幾つかを紹介します。

例1 原告の斉藤さんが東海労組合員であることを知っていたかについて

私たちの代理人が脇証人に、「原告の斉藤さんが東海労の組合員であるということを知らないと言いましたよね」と質問したところ、脇証人は、「はい」と即座に答えました。さらに再質問で「国鉄時代に動労という組合で、一緒にやっていたことはありますね」に対して、脇証人は「ええ昔は一緒にやったことはあります」とも答えました。

そして次の「JRになってからは？」との質問に脇証人は、「分裂した時（注 東海労組・現東海ユニオンから脱退して現東海労を結成）、私はJR東海労にいました」と答え、さらに、「その後、東海ユニオンに入ったのですね」と質問されて、脇証人は「はい」と即答したのです。

このやり取りで言えることは、私たちが東海労を結成した時に脇証人も、当時の東海労組の考えや行動に疑問をもち、東海労の結成に参加したのです。

したがって、どう考えても脇証人は、斉藤さんが東海ユニオンでも国労でもなく、東海労組合員だということを知らないと言った最初の証言は、嘘ということになります。

例2 「酒気帯び」をデッチ上げた当日の様子について

最初に質問した会社側弁護士に脇証人は、「横山助役が来たので確認するようお願いしました。そして斉藤社員に横山助役が、臭うなど、一言伝えました。」と、見ていたことを証言しました。しかしその後の私たちの代理人の、「横山助役が原告の酒臭を確認しているところを見ていましたか」という質問に、脇証人は「見ていません」と答えました。

さらに、「見ていない」という答えに対して私たちの代理人が、「主尋問（注 会社側弁護士からの質問）で原告と横山助役が酒の臭いについてやり取りをしていました、それで横山助役は臭うなど言っていましたというふうにお答えになっていましたけれども。それは、見ていないで言ったわけですね」と再確認された脇証人は、「見ていないでって……私はですね……」と答えに詰まったのです。

このやり取りで言えることは、会社側弁護士に答えたことと、私たちの代

理人に答えたことが、全く逆だということを表します。しかも会社側弁護士は、脇証人が2月3日（当日）の13時ころ書いたとしている、時系列等報告書を見せながら、横山助役が斉藤社員に「どれ（斉藤の口元へ）臭うな」、と言ったと、具体的に書いてあることを確認させていたのです。

したがって、どう考えても脇証人は同じ場面を「見ていた」と「見ていない」と証言したということになり、この証言はどちらかが嘘となります。しかも、脇証人が書いた時系列等報告書も信用できないということになります。

**例3** 酒気帯びかどうかは、管理者の総合的判断による、について

会社側弁護士から「脇証人が酒臭を感じたのはいつですか」との質問に、脇証人は「斉藤社員が点呼台の後方に来たので、近づいて50センチくらいのところでアルコール臭を確認した」と答えました。その後の私たちの代理人にも、同じように50センチと答えましたが、この時は「酒気帯びの疑いを持ちました」でしかなく、酒気帯びと確認したのではありませんでした。

私たちの代理人から「酒気帯びと確認したのはいつか」と再質問された脇証人は、「いつの時点ですかと言われても、まあ、小川助役から斉藤社員の前夜の飲酒について確認したころ」、「複数の管理者で確認したとき」と曖昧にしか答えられていません。しかも、酒臭は何回、確認したのですかに対して脇証人は、「斉藤社員が当直後方に来たときです」と、1回だけだったと答えました。

証言の途中で私たちの代理人の質問に対して、核心をはぐらかすような答えをしたところ、裁判長から、質問に的確に答えるように促がされ、「結論として、そのとき（注 12時20分頃）酒の臭いは感じていなかったというのが答えですか」と問われた脇証人は、「感じていなかったというか、感じているか感じてないかということは覚えていませんということです」とこれもまた曖昧な答えしかできませんでした。

このやり取りで言えることは、脇証人は、時系列等報告書や私の対策の作成時とその前後や退出を指示した時などに顔を合わせているにもかかわらずその間は、酒臭を確認できていないのです。したがってこれは後で無理やり酒気帯びをデッチ上げるための口実として出されている「管理者の総合的判断」に何としても結びつけ、デッチ上げを行ったということを自ら証明したもので、この証言も信用できない嘘でしかないこととなります。

## 運輸所のみなさん

どこでも構いません。管理者の恣意をなくして職場を働きやすくするために、声を聞かせてください。一言が、職場を変えるきっかけになります。